



▶ 理事長あいさつ

一般社団法人日本肩関節学会理事長 池上博泰



日本肩関節学会会員の皆様、紙面をお借りしてご挨拶を申し上げます。

新しい年が会員の皆様にとりましていっそうの飛躍の年になることを祈念いたしますとともに、本年も何卒よろしく願い申し上げます。新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の感染拡大に伴い、診療中も感染防止に神経を使われ、また厳しい医療機関の運営状況にご苦慮されている先生も多くいらっしゃると思います。

さて、2020年10月に二期目の理事長を拝命しました。ご支援頂きました会員、代議員の皆様には厚く御礼申し上げます。7月に発行されたニュースレター16号からこの6ヶ月の活動を4点に絞ってご説明申し上げます。

1. 学術集会の開催

学会のもっとも大きな事業は学術集会の開催です。第48回学術集会が岩堀裕介会長のもと名古屋市で開催されました(2021年10月29-30日)。また第18回日本肩の運動機能研究会が飯田博己会長のもと同時に開催されました。

COVID-19の状況を踏まえて、開催方法については岩堀会長と理事会との審議の結果、現地開催とWebとのハイブリッド開催となりました。学会期間中は、最近の第6波から比べると奇跡的に感染状況も改善していました。大きなトラブルやクラスターの発生もなく無事に学術集会が開催できたのは、岩堀会長をはじめ関係者の皆様のたいへんご苦勞のおかげです。あらためて感謝申し上げます。第48回学術集会の詳細については、本号のニュースレターで岩堀会長からの記事を参照していただけたらと思います。第49回学術集会は高瀬勝己会長のもと、2022年10月7-8日に横浜市で開催予定です。第19回日本肩の運動機能研究会は後藤英之会長のもと、同期間に横浜市で開催予定です。

2. 監事1名と新代議員6名の選任、代議員6年目の評価

2021年度の社員総会で監事1名の選任と6名の新代議員が選出されました(本号のニュースレターでごあいさつがあります)。代議員は、代議員選出規則第8条にあります評価項目および評価基準によって6年間に1度その評価が行われます。2020年は一般社団法人となって6年を経過して7年目をむかえたことから、初めてこの代議員6年目の評価が必要となりました。この審査を行うにあたっては、代議員資格評価委員会を立ち上げて委員会内で代議員28名に対して審議していただきました。昨年は評価の対象となった代議員9名に対しても、同様に学会活動および学術活動について厳正な審査をしていただきました。同じ代議員(しかも多くは先輩たち)を審査するという事は、非常にタフな仕事だったと拝察します。あらためて感謝申し上げます。

3. 国際論文奨励賞の設置

本号のニュースレターでも詳細なご案内がありますが、2021年の総会で国際論文奨励賞の設置が承認されました。総会ではこの賞の名称およびその応募要項について、多くの貴重なご意見をいただきました。ご意見をいただいた先生方には紙面をお借りして、御礼を申し上げます。具体的な設立趣旨や募集要項等は、本号のニュースレターを参照していただけたらと思います。

4. 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の感染拡大下での活動

この原稿を書いている時点ではオミクロン株による第6波のピークは未だ見えず、連日多くの新規感染患者が出ている状況です。おそらくこのニュースレターが発行される頃には、東京で1万人を超えていることと思います。まずは会員のみなさまの健康を第一に考えて行動していただきたく存じます。ご自分の健康を確保した上でのご家族、患者さんの健康であることは言うまでもありません。本学会の活動もこの原則を遵守して、活動をしていきたいと考えています。

2018年の第45回日本肩関節学会学術集会から会員連絡会が中止となっています。昨年は岩堀会長のご配慮でハイブリッドでの会員連絡会がありました。本学会からのお知らせは逐次Webサイトで更新しておりますのでご覧になりましたら幸いです。

末筆になりましたが、会員のみなさまから学会に対する要望がございましたら事務局宛にお知らせください。

▶ 新監事あいさつ

宇陀市立病院 仲川喜之



2021年10月28日の社員総会にて、日本肩関節学会の新監事にご推薦、ご承認いただきました仲川喜之です。1983年、奈良県立医科大学整形外科教室入局直後より、肩関節グループを主宰されていまして尾崎二郎先生に師事し、1985年本学会の前身であります日本肩関節研究会に入会させていただき、本年で37年の入会歴となり、私の整形外科人生は日本肩関節学会とともにあったと言っても過言ではございません。1988年に現在勤務しております宇陀市立病院に赴任し勤続33年になりますので、ほぼ全ての肩関節疾患の長期経過観察をすることができました。この間、学会活動といたしましては、主に肩甲帯部周囲の外傷に関するリサーチを行ってまいりました。肩関節周囲外傷の手術は研修医等、臨床経験の浅い整形外科医が執刀することが多いため、本来の手術方法の優劣より、手術手技の未熟さが治療成績を左右しているという問題や、術後経過観察期間が短いなどの問題より、本邦のみならず、国際的にもエビデンスレベルの高い発表論文が少ないなど多くの問題点が残されているように感じています。2016年からは代議員を務めさせていただき、編集委員会にて雑誌肩関節の査読、編集業務にあたらせていただきましたが、残念ながら、やはり肩関節外傷論文の未熟さが気になりました。将来的には、日本肩関節学会主導にて外傷症例の集積を行い、肩甲帯部周囲外傷治療に関するエビデンスの発信がなされることを夢見ております。今後は森澤豊監事とともに、日本肩関節学会の運営に貢献し、監査の職務を全うすべく努めてまいります。理事、代議員ならびに学会会員の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

▶ 新代議員あいさつ

松山赤十字病院整形外科 大前博路

愛媛県にある松山赤十字病院整形外科の大前博路と申します。このたび、伝統ある日本肩関節学会の代議員に選出していただきましたのでご挨拶申し上げます。

私は1998年に広島大学を卒業後、整形外科に入局しました。2003年大学院入学時に望月由先生が率いておられた肩診療班に加えていただき、日本肩関節学会に入会させていただきました。1年半Mayo Clinicに留学したのち、2007年から松山赤十字病院で肩関節外科を担当しています。2014年にJSS-SECECトラベリングフェローに選んでいただき、人工関節の手術を多く見学したことはその後の診療に大変役立っています。

愛媛県は人口 130 万人ですが、みかん農家や漁師さんが多く、肩を傷める患者さんが多くおられます。愛媛県で最初の日本肩関節学会代議員として、より良い肩関節手術を目指して努力していく所存です。

最後になりましたが、代議員選挙にあたり推薦人となっていただきました名越充先生、菊川和彦先生をはじめとする多くの先生方の多大なるご支援に深謝したいと思います。

千葉大学整形外科 落合信靖

このたび、横浜南共済病院整形外科山崎哲也先生および昭和大学藤が丘病院の西中直也先生に推薦人になっていただき、伝統ある日本肩関節学会の代議員に就任いたしました千葉大学整形外科の落合信靖です。私は1996年に千葉大学医学部卒業後に千葉大学医学部整形外科教室に入局し、2003年に日本肩関節学会へ入会しました。2007年に千葉大学整形外科の肩関節グループのチーフとして帰局後、肩関節疾患の臨床研究・診療のみでなく、基礎的研究を行い、第24回日本肩関節学会高岸直人賞基礎部門を受賞させていただきました。2018年4月より現職として、肩関節疾患の治療および大学院生の研究、臨床指導を含め基礎研究、臨床研究を続けております。日本の肩関節外科は現在も世界に発信できる素晴らしい技術と経験を有しておりますが、基礎研究においてはまだまだ未開の部分も多いかと思っておりますので、引き続き基礎研究を含めたより良い肩関節疾患の治療へ向けて研究を続けていきたいと考えております。また、2019年に日韓の交換留学制度で1か月韓国で研修させていただき、韓国での手術技術の高さ等を実感しました。アジアにおいては日韓が協力し、国際交流を通じて肩関節外科の発展に寄与させていただければと考えております。私は現在2019年よりリバーズ型人工肩関節運用委員、2021年より倫理・利益相反委員を拝命しており、これらの委員を通じ日本肩関節学会の発展に微力ながら貢献できればと考えております。この度日本肩関節学会の代議員となりましたので、日本の肩関節外科のさらなる発展、世界への発信に貢献できるよう精一杯邁進していきたいと考えておりますのでよろしくお願い申し上げます。

大阪大学整形外科 佐原 亘

このたび、日本肩関節学会代議員に選出して頂きました大阪大学整形外科の佐原亘でございます。

私は1998年大阪大学を卒業し2002年より菅本一臣教授のご指導のもと、大阪大学で肩関節疾患の診療と動態解析の研究立ち上げに携わりました。その後、米田稔先生、林田賢治先生、中川滋人先生にご指導頂き肩関節鏡手術をはじめ幅広く臨床経験を積ませて頂きました。2013年に再び大阪大学に戻り、これまでの経験を活かしかつ新たな知見を情報発信したいという思いで、診療と動態解析の研究に従事しております。

肩関節診療において腱板断裂や反復性肩関節脱臼に対する軟部組織の修復、再建をはじめ、骨折手術や人工関節置換術といった観血的手術など肩関節手術は多岐にわたります。また、他の関節疾患でも同様ですが、特に肩関節診療では画像診断だけではなく、理学的所見や機能診断が必要不可欠です。これが肩関節診療の難しさでもあり魅力でもあると感じています。今後は未解決な課題を一つ一つ解決するとともに、肩関節の魅力を学会員の皆様にお伝えできればと思っています。

本学会では代議員の先生方をはじめ多数の学会員の先生方に学術集会や講演会などで貴重なご意見をたくさん頂き、勉強させて頂きました。深く感謝しております。これからは今まで頂いたご恩を皆様にお返しするとともに、この伝統のある日本肩関節学会を益々発展させられるように尽力する所存でございます。何卒宜しくお願い申し上げます。

関節外科スポーツクリニック石巻 八田卓久

このたび、日本肩関節学会の代議員に選出していただきました八田卓久と申します。

私は2002年に東北大学医学部を卒業後、2008年に本学会会員になり肩関節外科の診療や手術に取り組むとともに臨床研究、基礎研究に励んでまいりました。特に、腱板修復や人工関節手術後の力学的特徴の変化に関して興味を持ち、東北大学名誉教授井樋栄二先生のご指導の下、2014年より米国 Mayo Clinic に留学し、生体力学研究ならびに臨床研究に力を入れてまいりました。また、2017年には日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会—フランス関節鏡学会 (JOSKAS-SFA)、2019年には日本整形外科学会—米国整形外科学会 (JOA-AOA) トラベリングフェローへの参加を通して、国際的な肩関節外科の取り組みを学んでまいりました。今後は、肩関節外科医を目指す若い世代の先生方に少しでも還元できればと考えております。

国際的な手術診療を学ぶ中で、欧米で近年増加している Ambulatory surgical center に強く興味を持ちました。術後早期復帰を目指すチーム医療のシステム等を学ぶ中で私自身が積極的に関わりたいと考えるようになり、東北大学整形外科のご支援の下、2021年5月に関節外科スポーツクリニック石巻を開院し、肩疾患を中心に専門的な手術診療を行っております。また、現在も東北大学非常勤講師として基礎研究を継続しており、大学院生の指導に携わっております。

歴史のある日本肩関節学会が更に発展し、世界の肩関節外科をリードしていけるように微力ではございますが貢献できればと考えております。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

最後に、代議員選挙にあたりまして推薦人となっていただきました滋賀医科大学今井晋二先生、東北大学山本宣幸先生、ご支援をいただきました東北大学整形外科の先生方をはじめとする多くの先生方に厚く御礼申し上げます。

麻生整形外科病院 廣瀬聡明

麻生整形外科病院（あさぶせいけいげかびょういん）の廣瀬聡明（ひろせとしあき）と申します。

このたび、日本肩関節学会代議員に選出していただきましたのでごあいさつ申し上げます。

私は1995年に札幌医科大学を卒業し、札幌医科大学整形外科に入局いたしました。学生時代に野球部で肩痛を経験したことがあることから肩関節に興味があり、当時肩関節鏡手術をバリバリ行っていた岡村健司先生に師事し、肩関節外科の道へ進みました。岡村先生のもとで肩の診断から治療まで厳しく指導を受けたことが今の私の財産となっております。岡村先生の後を受け、札幌医科大学肩チームのチーフとなってからは鏡視下手術を中心に幅広くさまざまな手術を手掛けました。また本学には肩を志す熱意のある若手が多く、彼らとともに臨床、研究に取り組んだおかげで北海道から数多くの知見を発信することができたと思っております。

私は大学院時代に北海道大学の遺伝子病制御研究所で移植免疫の研究をさせていただきました。またその後、米国コネチカット大学へ留学させていただき、Dr. Mazzocca の指導のもと、臨床（骨髄幹細胞移植を併用したパッチ症例の臨床研究）、バイオメカ（肩鎖靭帯の制動性）、biology（PRP、骨髄幹細胞移植、軟骨病変に関連する因子）の研究に携わることができ、帰国してからも研究を継続してまいりました。

今後はこれらの経験を生かして本学会員すべての皆様の、ひいては社会全体の利益のために、肩関節医学を啓蒙し、その研究で得られた知見を還元できるよう全力を尽くしたいと考えております。まだまだ未熟者ではございますが、精一杯活動に取り組んでまいりますのでどうぞよろしくお願い申し上げます。

福岡大学病院整形外科 三宅智

福岡大学病院整形外科の三宅智（みやけさとし）と申します。このたび日本肩関節学会代議員に選出していただきましたのでご挨拶申し上げます。

私は、2009年4月に福岡大学医学部整形外科学教室に入局し、同年9月に日本肩関節学会に入会いたしました。

福岡大学の肩関節外科の伝統は、初代教授の高岸直人先生に始まり、松崎昭夫教授、柴田陽三教授、伊崎輝昌准教授に引き継がれてきました。私は、現在伊崎輝昌准教授の下、福岡大学の肩関節診療班の一員として臨床および研究に励んで参ります。この伝統を引き継げる肩関節外科医に少しでも近づけるよう精進して参ります。

北海道のえいわ病院玉井幹人先生に2016年から1年間ご指導頂き、肩関節外科の技術のみならず、医師として患者さんとうまく向き合うべきかを学ばせていただきました。「患者さんは教科書であり、治療を行っている患者さんの顔に笑顔が浮かんでいるかどうかを常に気かけなさい。」という言葉をお忘れずに、いち医療人として精進して参ります。

日本肩関節学会には、これまで発表や論文などを通して多くのご指導を賜り、育てていただきました。世界で最も長い歴史と伝統のある日本肩関節学会を支えてこられた先輩方に感謝し、学会のさらなる発展のために、微力ではありますが、鋭意努力してまいる所存です。今後とも一層のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

▶ 第48回日本肩関節学会学術集会を終えて

第48回日本肩関節学会学術集会 会長 岩堀裕介

医療法人三仁会あさひ病院スポーツ医学・関節センター長



Felix H Savoie 先生との国際シンポジウム

皆様のご協力により、2021年10月29日(金)～10月30日(土)、ウイックあいちにおいて、第48回日本肩関節学会(JSS)・第18回日本肩の運動機能研究会(JSSFR)を無事、ハイブリット方式で開催することができました。

COVID-19禍で準備を進めておりましたが、8月の第5波に直面した際には、完全Web開催への変更も頭をよぎりました。しかし、幸運にも急速に感染状況が改善したため、予定通り現地参加を募るハイブリッド方式で開催いたしました。オンデマンド配信終了時点での参加登録者数は、総数1,333名(正会員670名、準会員274名、非会員261名、研修医1名、学生14名、招待者113名)で、そのうち現地参加者は総数524名(正会員306名、準会員100名、非会員91名、研修医1名、学生2名、招待者24名)と、最低限の目標はクリアできたと思われまふ。現地参加・Web参加いただいた会員の皆様には、本当に学術集会にご協力いただき深謝いたします。

学術集会前日の10月28日(木)には、学術集会会場の大ホールを利用して、名誉会員・代議員の先生方と来賓招待者+αの総勢80名程度の参加者で会長招宴を行いました。例年はホテルの宴会場においてパーティー形式で行われていましたが、今回は、会長2名の挨拶、来賓招待者5名のご挨拶、海外講師4名のビデオメッセージの上演、コンテンポラリーダンスの演舞といったプログラムを飲食なしで1時間程度にて執り行いました。主賓のご挨拶は、中部労災病院院長 佐藤啓二先生、名古屋大学医学部整形外科学教授 今釜士郎先生、名整会会長 前

田登先生、医療法人三仁会理事長 前田健博先生、日本肩関節学会理事長・東邦大学医療センター大橋病院教授 池上博泰先生からいただきました。おもてなしとしては十分ではなかったかと存じますが、参加者の皆様からはCOVID-19 禍での会長招宴の新しい開催様式としてご評価いただきました。

2日間の現地プログラムにおいては、2つの特別講演、1つの文化講演、1つの特別教育講演、8つのシンポジウム（JSS 関連4つ、JSS・JSSFR コンバインド関連が2つ、JSSFR 関連が2つ）、11の企業共催ランチョン・アフタヌーンセミナー、3つのワークショップと主題が行われました。シンポジウムのうち2つは国際シンポジウムとして行われ、北米5名、韓国4名の海外講師にオンライン参加いただき、プレゼンテーションと総合討論も行われました。一部で同時通訳が機能しない場面がありましたが、時差の問題がある北米の講師の先生方にもリアルタイムで討論ができました。特別講演1は、私の米国留学時代の恩師である Tulane 大学の Felix H Savoie 先生にお願いし、プレゼン時には Web 参加していただきました。特別講演2は、名誉会員で松戸整形外科病院顧問の黒田重史先生に第一会場の最後のプログラムでご登壇いただきました。黒田先生にとって最後の講演活動とのことで、ご家族も最前列でお見守りになり感動的な時間を共有させていただきました。文化講演の野球解説者の川上憲伸氏、特別教育講演の愛知医科大学感染症科の三鴨廣重先生にも現地参加して学術集会を盛り上げていただきました。

公募し採用されました601演題（JSS 関連の1演題は取り下げ）のうち、主題に採用された121演題（JSS 関連77演題、JSSFR 関連44演題）は口演発表いただきましたが（1演題は取り下げ）、その他の479演題は一般演題としてアーカイブ形式にて、10月29日から11月30日までオンデマンド配信致しました。討論ができない点を補うために閲覧者がチャットにより質問できるようにし、その質問内容を発表者にメールで送信して回答していただくようにしました。また、閲覧者には演題の採点をしていただき、その総合得点のランキングに基づき、JSS と JSSFR それぞれにおいて、一位（金鯨賞）3万円、二位（銀鯨賞）2万柄、三位（銅鯨賞）1万円の賞金を授与させていただきました（詳細は学術集会ホームページをご覧ください）。



三鴨廣重先生と川上憲伸氏

特別講演・文化講演・特別教育講演・会長講演・シンポジウム・主題・共催セミナー・ワークショップ（座学）については、討論部分も含めて現地開催終了後に編集して、2週後の11月15日から4週間11月30日までの2週間、一部のプログラムを除きオンデマンド配信させていただきました。今回は現地プログラムのライブ配信を行いませんでしたので、Web 参加登録された方はその2週間に閲覧していただき、現地参加された方には、プログラムの都合で視聴できなかった演題、復習したい演題を閲覧できるように致しました。

現地参加者の皆様には、久々に県を跨いで学術集会にリアル参加して、懐かしい会員と直接言葉をかわし、熱い討論ができて良かったと喜んでいただけました。しかし、一方で慣れないハイブリッド開催のために運営上の不備も多々ありましたことについて慎んでお詫び申し上げます。そうした不備を検証するために、現地プログラム終了後、参加登録された方々にアンケート調査をお願いしました。その内容につきましては整理して、またご報告申し上げます。

皆様のご協力の元に、「プロ意識」「熱意」「思いやり」の3つをスローガンに掲げた今回の学術集会が無事ハイブリッド開催できましたことを重ねて感謝申し上げます。



黒田重史先生と前理事長 柴田陽三先生



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

Newsletter

2年近くのCOVID-19禍の間に、学術集会・研究会がWeb開催でも可能なことは学びましたが、今回、久々に現地開催してみても、あらためて対面で議論することの素晴らしさを認識し、様々な苦労や障壁はありましたが、ハイブリッド開催して良かったと思います。

長文となりましたが、学術集会のご報告と御礼のご挨拶とさせていただきます。

本当にありがとうございました。

第48回日本肩関節学会

会 長 岩堀裕介（医療法人三仁会あさひ病院スポーツ医学・関節センター長）

第18回日本肩の運動機能研究会

会 長 飯田博己（愛知医科大学病院リハビリテーション部副技師長）

事務局長 酒井忠博（トヨタ記念病院整形外科部長）

運営委員 平岩秀樹（名古屋大学医学部整形外科講師）

梶田幸宏（愛知医科大学医学部整形外科講師）

伊藤岳史（あさひ病院スポーツ医学・関節センター、整形外科）

山本隆一郎（あさひ病院スポーツ医学・関節センター、整形外科）



サポートメンバーとの集合写真

▶ 第49回日本肩関節学会学術集会会長あいさつ

第49回日本肩関節学会学術集会 会長 高瀬勝己

東京医科大学運動機能再建外科学寄附講座教授



第49回日本肩関節学会学術集会を2022年10月7日(金)、8日(土)に横浜市のパシフィコ横浜ノースにて開催させていただきます。歴史ある本学会を東京医科大学整形外科学分野が主催させて頂くことを大変誇りに思います。

今回の学会テーマは「飛耳長目ー知見から創造へー」とさせて頂きました。飛耳長目とは、「飛耳」は遠くの音を聞くことができる耳、「長目」は遠くまでよく見通す目を持ち合わせるという意味から、すぐれた情報収集能力があり深い観察力と鋭い判断力を備えることのとえです。この観点で肩関節外科の新たな展開を導くことを念頭に様々なセッションを計画させて頂きたいと思っております。

一方、海外における疾患に対する最近の治療方法や考え方を頂くために、Wayne Z Burkhead Jr 先生(米国テキサス)、Richard E Debski 先生(米国ペンシルベニア)、Alessandro Castagna 先生(イタリア)、Markus Scheibel 先生(ドイツ)、Knut Beitzke 先生(ドイツ)、Young Girl Rhee 先生(韓国)の先生方をお招きする予定です。お招きする予定の先生方には招待講演とは別に国際シンポジウム(病態より検討した肩鎖関節脱臼の治療・上腕骨近位端骨折に対する Anatomical SA あるいは Reverse TSA の選択)にも参加をして頂きます。

また近年、リバーズ型人工肩関節置換術の開発や手術器械の格段の進歩があり、これらの機材を適切に使用し良好な治療成績を得るために、熟練した先生方に講演して頂き情報交換の場にもなればと考えております。

一方、COVID-19の流行により国内外の学会が余儀なく中止あるいはWebによる運営がなされてきました。現時点では感染状況は不明確ではありますが、学術集会における最大の役割はface to faceによる活発な議論や個々の情報交換できる場と考えております。このため、現地参加による学術集会の開催を最優先にして準備させて頂きたいと思っております。

横浜は私の出身高校が所在する場所ですが、関内地区を筆頭とした観光名所および中華街を代表に食の中心地でもあります。COVID-19の感染状況に左右されることは十分に承知しておりますが、学会以外でも十分に英気(鋭気ではなく)を養っていただけのものと考えております。2日間の短い期間ではありますが、様々な知識や情報に触れて頂き、ご参加して頂いた皆様方にとって充実した学術集会になることを切望いたします。

多くの皆様のご来場を心よりお待ちしております。

第49回 The 49th Annual Meeting of the Japan Shoulder Society
日本肩関節学会
飛耳長目
Sharp eyes and ears used for collecting information far and wide
知見から実践へ
Conversion from knowledge to practice
会期 2022年 10月 7日(金)・8日(土)
会場 パシフィコ横浜 ノース
会長 高瀬 勝己 東京医科大学 運動機能再建外科学 さいたま地域教育寄附講座 教授
幹事 第19回日本肩の運動機能研究会 東京医科大学 健康科学部 健康スポーツ科学科 教授
[会長] 後藤 英之 聖隷聖大学 健康科学部 健康スポーツ科学科 教授
[主催] 東京医科大学 医学部整形外科学科 運動機能再建外科学 整形外科学分野
[協賛] 株式会社JTBコミュニケーションデザイン 東京目黒区 コンベンション/第二東横線内
TEL: 03-5627-8550 FAX: 03-5624-8550 E-mail: 49sjss@jssom.co.jp
第49回 日本肩関節学会の最新情報はここら
<https://convention.jbcom.co.jp/49sjss>



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

Newsletter

▶ 第 50 回・第 51 回日本肩関節学会学術集会のお知らせ

第 50 回日本肩関節学会

学術集会会長：池上博泰（東邦大学医学部整形外科学講座（大橋））

開催日時：2023 年 10 月 13 日（金）～ 14 日（土）（予定）

開催場所：東京 / 京王プラザホテル（予定）

第 51 回日本肩関節学会

学術集会会長：今井晋二（滋賀医科大学整形外科教室）

開催日時：2024 年 10 月 25 日（金）～ 26 日（土）（予定）

開催場所：京都 / 国立京都国際会館（予定）



▶ 国際論文奨励賞設置と募集について

理事長 池上博泰

—国際論文奨励賞募集について（ご案内）—

謹啓

一般社団法人日本肩関節学会は、第47回日本肩関節学会からの使途特定寄付金を受け入れ、これを財源とする「国際論文奨励賞」を設置します。以下の要領で募集いたしますので、奮ってご応募ください。

謹白

記

【国際論文奨励賞設立趣旨】

本賞は、日本から世界に情報発信するという第47回日本肩関節学会（末永直樹会長）のテーマを継承するため、日本肩関節学会の公式英文雑誌（Journal of Shoulder and Elbow Surgery 等）への投稿を奨励することを目的とする。掲載論文数に応じた奨励金を贈呈する。

【募集要項】

(1) 応募要件

国際論文奨励賞に応募できるのは、一般社団法人日本肩関節学会正会員または準会員1号であり、以下の条件をすべて満たす者とする

1. 1年間（8月1日より翌7月31日迄）で下記雑誌に3編以上掲載（アクセプトまたは掲載された日付を有効とする）されていること
2. 対象となる雑誌は以下のとおりとする。ただし、対象論文のうち少なくとも1編はJSESに掲載されていること
 - ・JSES (Journal of Shoulder and Elbow Surgery)
 - ・JSES International
 - ・Seminars in Arthroplasty: JSES
 - ・JSES Reviews, Reports & Techniques
3. 会員在籍期間に論文がアクセプトされていること
4. 本賞の採否決定まで継続して会員資格を有すること
5. 肩に関する原著論文であること（症例報告、Reviewは対象としない）
6. 応募者は筆頭著者であること
7. Corresponding authorは日本国内施設に在籍していること
8. 肩関節学会学術集会での発表の有無は問わない

(2) 奨励賞の額

論文3編 20万円、論文4編 30万円、論文5編以上 50万円

(3) 募集期間

8月1日～翌年7月31日

(4) 応募方法

応募フォーム (<https://business.form-mailer.jp/fms/e0148224155840>) に対象論文（アクセプト日及び掲載日のわかるもの）を添付し、事務局へ送信する

(5) 選考方法

高岸直人賞決定委員会で審査決定する。再受賞はこれを妨げない

(6) 表彰

日本肩関節学会学術集会で理事長が表彰する

(7) その他

初年度の掲載対象期間は2021年8月1日より2022年7月31日までとする

募集要項は2年ごとに見直す

【問い合わせ先】

一般社団法人日本肩関節学会 事務局 / E-mail : office@shoulder-s.jp

以上

▶ 各委員会報告

雑誌「肩関節」編集委員会

委員長 佐野博高

雑誌「肩関節」編集委員会では、2021年秋に、予定通り第45巻1号から3号をWeb公開することができました。

・投稿論文数：137編：

学術集会発表論文91編 / 原著・総説5編 / 症例報告12編 / proceeding29編

・採択論文数：126編：

学術集会発表論文83編 / 原著・総説2編 / 症例報告12編 / proceeding29編 / 取り下げ・Reject 11編

この場を借りて、論文をご投稿下さった先生方、査読にご協力いただいた代議員並びに査読委員の先生方に、改めて厚く御礼申し上げます。今後は第46巻への投稿論文について査読・編集作業を進めてまいりますので、引き続きご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

さて、近年肩関節の3次元的可動域を示す用語として、「1st内(外)旋、2nd内(外)旋、3rd内(外)旋」という略語が用いられることが増えてきました。こうした状況を踏まえて、当委員会では、学術委員会に諮りつつ、投稿論文におけるこれらの略語の扱いについて検討を行いました。これらの略語は、日本整形外科学会発行の整形外科学用語集第8版にも収載されておらず、学術用語としてまだ十分認知されているとは言えません。また、「1st、2nd、3rd」は本来「運動平面(plane)」を示していたものが、省略により、直接「内(外)旋」にかかっていると誤解される恐れがあることから、論文内で用いる場合は正式な用語を併記した上で使用すべきである、という結論になりました。一方、「リバーズ型人工肩関節置換術」については、「反転型人工肩関節置換術」という名称も整形外科学用語集に収載されていることから、両者とも正式な名称として論文内での使用を認めていくことが確認されました。会員の先生方におかれましても、ご留意いただければ幸いです。

雑誌「肩関節」委員会では、投稿者の利便性を向上させるために、投稿規定やチェック表を随時改訂しています。本誌に論文を投稿される際は、日本肩関節学会のWebサイト(<https://www.j-shoulder-s.jp/entryrule/index.html>)で、最新の情報をご確認下さるようお願いいたします。

国際委員会報告

委員長 三幡輝久

2020年以来日本肩関節学会の国際交流事業もCOVID-19パンデミックの影響で中止や延期が続いていましたが、このたび2022年の日本肩関節学会からASES(アメリカ肩肘学会)への留学生2名を募集しております。必ず貴重な経験になることは間違いありませんので奮ってご応募ください。

2022年度SECEC(ヨーロッパ肩肘学会)トラベリングフェローとして、東北北海道病院の大野洋平先生にヨーロッパの著名な先生の施設を訪問していただく予定です。2021年秋のSECECトラベリングフェローの受け入れは中止となりました。次回の受け入れは2023年となる予定です。

KSES(韓国肩肘学会)に関しては、2020年2021年のプログラムはCOVID-19により中止となりましたが、2023年春に派遣するフェローの募集を2022年5月より行う予定です。また2022年秋には韓国からのKSESフェローの受け入れを行う予定です。

2022年からは正常な国際交流が再開することを願っております。

高岸直人賞決定委員会報告

委員長 船越忠直

第34回(第47回日本肩関節学会学術集会:2020年)高岸直人賞受賞者として以下の二つの論文が決定いたしましたのでご報告申し上げます。

【基礎】

稲城市立病院 整形外科 高田裕平先生

「腱板断裂後の筋内脂肪浸潤には加齢と時間経過が必要である」

【臨床】

大阪大学大学院医学系研究科 整形外科 廣瀬毅人先生

「アンカー挿入位置がBankart修復術後関節窩前縁変化に与える影響」

第48回日本肩関節学会学術集会:2021年のベストアブストラクトとして以下の17演題が選ばれました。

【基礎】

篠原一生先生(神戸大学大学院医学研究科 整形外科)

「Stump分類に基づくAGEsの腱板脆弱性への影響」

田澤諒先生(町田市民病院 整形外科)

「腱板付着部線維軟骨の成熟過程におけるScx/Sox9共陽性細胞の局在」

長谷川彰彦先生(大阪医科薬科大学 整形外科)

「肩上方関節包再建術後における大腿筋膜グラフト治癒過程の組織像」

瀬戸貴之先生(慶應義塾大学 整形外科)

「腱板断裂における腱板構成筋変性機序の評価」

浅野博美先生(岐阜大学 整形外科)

「腱板断裂において前上腕回旋動脈血流速は滑膜炎と疼痛に関連する」

宇野智洋先生(山形大学 整形外科学講座)

「家兔陳旧性腱板断裂での骨髓由来の多血小板フィブリンの修復効果」

広沢直也先生(千葉大学 整形外科)

「高脂血症モデルマウスの肩腱板におけるMMP13上昇」

小島良太先生(宇治武田病院 整形外科)

「MR画像の二値化処理による腱板筋脂肪浸潤の定量評価の試み」

【臨床】

井樋栄二先生(東北労災病院 整形外科)

「肩関節初回前方脱臼に対する外旋位固定の長期成績」

無藤智之先生(信原病院 整形外科)

「広範囲腱板断裂術後成績の予測因子 - データマイニングでの検討 -」

長谷川彰彦先生(大阪医科薬科大学 整形外科)

「鏡視下SCR術後のグラフト治癒状態と治療成績の関係 - 多施設研究 -」

船越忠直先生(慶友整形外科病院)

「Internal impingementに対する前方関節包靭帯再建術」



中川滋人先生 (行岡病院 スポーツ整形外科)

「13.5%以上の関節窩骨欠損は本当に critical size か?」

古旗了伍先生 (慶應義塾大学 整形外科)

「腱板広範囲断裂における単純 X 線変化の進行因子」

久田幸由先生 (整形外科北新病院)

「術後10年以上経過した上腕骨ノンセメントステムのルースニング」

廣瀬毅人先生 (大阪大学大学院医学系研究科 器官制御外科学 (整形外科))

「Bankart 修復術後早期関節窩横径減少は術後再発に影響を与えるか」

荻野修平先生 (松戸整形外科病院)

「吸収系を用いた経骨孔鏡視下腱板修復術の術後成績」

国際論文奨励賞について

第47回日本肩関節学会からの使途特定寄付金を財源とする賞の設立を理事会より高岸直人賞決定委員会に諮問されました。委員会では『国際論文奨励賞』として骨子を決めて理事会、社員総会に報告し、これが承認され、来年より表彰が開始される予定です。募集要項に関しては別にご案内を申し上げます。

お忙しい中、高岸直人賞選考にご協力頂いた先生、またベストアブストラクトの論文選定にご協力をいただいた岩堀裕介 会長はじめ、すべての代議員の先生に心からお礼を申し上げて、委員会報告と致します。

社会保険等委員会報告

委員長 望月智之

2024年の診療報酬改定におけた新規術式に関する話し合いを行い、反復性肩関節脱臼に対する「肩関節唇形成術(烏口突起移行術を伴う)(関節鏡下)」、拘縮を伴う腱板断裂に対する「肩腱板断裂手術(関節授動術を伴う)(関節鏡下)」を記載要望する新規手術方式の候補と致しました。

実態調査である手術アンケートは外保連や中医協に対して新たな手術手技の申請・要望を行う上で、大変重要な資料となります。今回行うアンケート項目に関しまして討議し、A、B項目は継続、C項目に複数手術の件数①関節唇形成術+烏口突起移行②腱板断裂手術+授動術、D項目に salvage 手術としてのリバーズ型人工肩関節置換術の調査を行うことと致しました。アンケート調査は2021年1月から2021年12月までの症例が対象となり、ウェブを用いてご回答いただくこととなりました。2022年2月にアンケート調査を開始し、2022年3月末日までにご提出をお願いする予定です。お手数をお掛けしますが、その際には会員の先生方にご協力を賜りたくお願い申し上げます。



教育研修委員会報告

委員長 後藤英之

今年度の教育研修委員会の活動内容について報告致します。

第13回教育研修会を第48回日本肩関節学会開催期間中に開催しました。学術総会はハイブリット開催で、直接参加されなかった方は、オンデマンドとなりました。現地での聴講は早朝開催にも関わらず多数のご参加を賜り誠にありがとうございました。講演のハンドアウトは会員専用の学会ホームページから入手できるようにしていますのでご活用ください。

第13回教育研修講演(会場:ウイंकあいち)

教育研修講演1:10月29日(金)(日整会単位:9,3)

座長:菊川和彦先生(マツダ病院 整形外科)

演題1:肩関節周囲骨折の診断と治療

演者:相澤利武先生(いわき市医療センター 整形外科)

演題2:小児の肩関節疾患

演者:船越忠直先生(慶友整形外科病院)

教育研修講演2:10月30日(土)(日整会単位:9,2,Re)

座長:菊川和彦先生(マツダ病院 整形外科)

演題1:人工肩関節置換術の基礎と実際

演者:小林尚史先生(八王子スポーツ整形外科)

演題2:肩のスポーツ障害の診断と治療

演者:国分毅先生(神戸医療センター 整形外科)

また、第5回日本肩関節学会キャダバーワークショップを2年ぶりに開催しました。当初は9月に予定しましたが、COVID-19感染の拡大の影響で延期とし、感染状況が改善した11月27日(土)、28日(日)に、名古屋市立大学先端医療技術イノベーションセンターにて開催致しました。参加者は関節鏡コース6名、切開手術人工関節コース8名の合計14名で、関節鏡視下手術、直視下・人工関節手術コースそれぞれ3テーブルずつ、6人の講師によって手術手技の実習指導をして頂きました。また、11月27日(土)18時00分から第5回肩関節疾患手術手技フォーラムを名古屋市立大学会議室(JPタワー名古屋5階)にて開催し、講演会および企業展示を行いました。幸い、体調不良者やトラブルなどの発生なく無事終えることができ、参加者の皆様からは有意義であったとご好評をいただきました。

第5回キャダバーワークショップ・肩関節疾患手術手技フォーラム 講師

相澤利武先生(いわき市医療センター 整形外科)

菊川和彦先生(マツダ病院 整形外科)

国分毅先生(神戸医療センター 整形外科)

小林尚史先生(八王子スポーツ整形外科)

酒井忠博先生(トヨタ記念病院 整形外科)

船越忠直先生(慶友整形外科病院) (五十音順)

本会の開催に当たっては、運営事務局のNPO法人メリ・ジャパン様をはじめ関係各位の皆様のご多大なご協力、

協賛を頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。現在、海外渡航も困難でキャダバーの研修が十分に受けられない状況にあり、国内でのワークショップは大変貴重な機会と思われます。今後も感染防止対策を万全に整えた上でより良いワークショップとなるよう企画していきますので、ご指導、ご意見を頂けますようお願い致します。



集合写真



ワークショップ風景



ワークショップ風景

学術委員会報告

委員長 藤井康成

学術委員会の活動報告では、以前に行った「凍結肩」および「肩鎖関節脱臼」のアンケート調査を基に内容を精査し英文雑誌に投稿させて頂きました。現在、新たなアンケート調査をすべく委員会内で検討しているところです。

調査企画として、1) 広範囲腱板断裂に対する手術療法と、2) 腱板脂肪変性評価として代表的な Goutallier 分類の問題点を探る、以上2点を考えております。後者に関しては、日本肩関節学会員の先生方に実際の症例におけるMRIによる画像を評価頂き、その一致率を調査することを模索しております。これらの項目に関して、委員会内で数回のWeb会議を開き、アンケート内容や調査方法を審議して参りました。調査内容が正式に決定次第、会員の先生方には調査依頼を学会事務局から送付させて頂く予定です。先生方にはご多忙の折、誠に申し訳ありませんが何卒ご協力を賜りたいと思っております。

一方、以前より検討しておりました「肩関節初回前方脱臼に対する外転外旋固定法の多施設共同研究による前向き研究」に関する報告をさせて頂きます。本研究は、装具の外転外旋位保持機能に不具合および集まった症例数を鑑み、現時点では研究継続が困難な状況となっております。委員会及び理事会でこの内容を精査させて頂き、最終的には本研究を中止することとなりました。ご協力を頂きました各施設並びに学会員の皆様に深謝致します。

また、2022年も第95回日本整形外科学会学術総会と第36回日本整形外科学会基礎学術総会にシンポジウム案を提出し、以下のシンポジウム案が採用されています。

第95回日本整形外科学会学術総会

採択：肩鎖関節脱臼の基礎と臨床

第36回日本整形外科学会基礎学術集会

採択：術後の腱板修復に影響を与える因子

2022年も委員会一丸となって、前述の二つの大きな企画を推し進めて参る所存でございますので、今後とも学術委員会活動に対しまして、会員の皆様の益々のご理解ならびにご協力を賜りますよう、宜しく御願い申し上げます。



広報委員会報告

委員長 北村歳男

広報委員会の役割は、ニュースレターを通じて肩関節学会員に学術集会や教育研修会、理事会や委員会の活動などを定期的に会員に伝達紹介し、効率的情報伝達ができるようにすること、また一般の人たちにも日本肩関節学会の活動と肩関節外科医の役割や活動を周知していただけるようにすること、さらに非学会員に対しては肩関節外科の魅力のアピールし、学会員や協力企業の増加に寄与する活動を行うことです。

そのため従来の委員会活動の報告以外にも、新企画を設け肩関節学会の魅力伝えることとしました。

1. 肩関節外科の最新の学術情報を伝える
2. 肩関節外科医を志す人に肩関節外科の魅力伝える
3. 留学などを行っている海外の肩学会会員からの海外の情報を伝える

これらの3新企画の作成のために大変活発な委員会活動になっており、所属委員は大変頑張っています。さらにホームページの活用が不可欠と考え、新規作成を検討しているところです。

将来魅力的なホームページの活用ができ、一層の肩関節外科の魅力のアピールし、学会員や協力企業の増加があればと考えています。

年2回のニュースレターの発行は継続していきます。様々な取り組みを検討し、皆様からの意見や情報を取り入れつつ肩関節学会の広報活動を行っていきたくと考えています。

財務委員会報告

委員長 中川滋人

会員の会費徴収方法について変更がありましたので報告させていただきます。本学会の会計年度は8月1日から翌年7月31日までとなっていますが、例年学術集会の抄録提出が締め切られる5月以降に入会される方が多くなります。5月から7月の間に入会される会員は会期末までの期間が短くなりますので、この時期に入会された会員の入会年度会費の徴収方法について当委員会で検討しました。

本学会の年会費は、正会員・準会員1号15,000円、準会員2号5,000円ですが、正会員・準会員1号の会費にはJSES購読料5000円(実際には50ドルのため約6,000円ですが)が含まれているため、これを引いた10,000円の半額の5,000円、準会員2号はそのまま半額の2500円の徴収という案が採択され、理事会に上申いたしました。

この案をもとに定款等運用委員会で作成していただいた会費規則変更案が理事会・社員総会で承認され、運用が開始されました。2022年5月以降に入会される会員についてはこの会費規則が適用されますので、先生方の関係者で入会される方々にご周知の程、よろしくお願いいたします。

コロナ禍の影響で各種事業が中止になったこと、2020年度から日本肩の運動機能研究会が正式に発足し、準会員1号、2号の入会者が増加したことによる入会金・年会費の増収により、本学会の財務状況は改善しつつありますが、決して潤沢ではありません。財務のさらなる改善には、会員数の増加が最も有効な手段でありますので、先生方の身近におられる医師・コメディカルの方々の入会勧誘を積極的に行っていただけますよう、よろしくお願いいたします。



倫理・利益相反委員会報告

委員長 名越充

日本肩関節学会会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のことと存じます。

ご存知の先生方も多いとは存じますが、「ヒトゲノム・文部科学省遺伝子解析研究に関する倫理指針（平成25年厚生労働省告示第1号）」および「人を対象とする医学系経済産業省研究に関する倫理指針（平成26年文部科学省告示第3号）」が令和3年6月30日にて廃止となりました。新たに令和3年3月23日に「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針（文部科学省、厚生労働省、経済産業省）」が制定され、「個人情報保護に関する法律」「臨床研究法」「遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律」「動物の愛護及び管理に関する法律」などを加えた関連法規を遵守した、生命に対する倫理的配慮が研究活動において必須事項となりました。

これに基づき、日本整形外科学会では、倫理的適正のある研究を学会で採択することを目的とした「学術集会演題応募における倫理的手続きに関する指針」が策定されました。本指針は令和4年11月に演題募集を行う第56回骨・軟部腫瘍学術集会（会期：令和5年7月13日・14日）から導入・試行され、第57回骨・軟部腫瘍学術集会（会期：令和6年未定）から本格運用となります。日本整形外科学会の学術集会に演題応募する際には、倫理申請を要する研究は所属機関の倫理審査委員会などで研究開始前に倫理審査・承認が必要となります。

今後、日本肩関節学会においても日本整形外科学会に準じた取り組みを行うことが、医学研究を取り扱う学会としての社会的責任であると考えております。日本整形外科学会の指針内容を必ずご確認ください、早めの取り組みを行って戴ければと存じます。

また、本年度は利益相反自己申告実施の年となります。本年8月頃に自己申告書類をメール送信致しますので、関係する先生方はご理解とご協力のほど何卒宜しくお願い致します。

定款等運用委員会

委員長 西中直也

本委員会で審議し、社員総会で承認された事項を報告致します。

会費規則第4条会費の納入期限について

本学会の年度は7月31日締めのため、5月以降の入会者はこれまで会費が免除になっていました。準会員制度が設けられたこともあり、財務委員会より5月から7月の入会者の年度内の会費についての見直しが提案されました。財務委員会での改正内容案が、理事会、当委員会にて審議され、最終的に以下のごとく2021年10月28日の社員総会で承認決議されました。

会費規則第4条会費の納入期限について

会費は、その事業年度末までに会費の全額を納入するものとする。ただし、新規加入会員の加入年度の会費は、次の通りとする。

8月から4月に入会する者

- (1) 正会員 15,000 円
- (2) 準会員1号 15,000 円
- (3) 準会員2号 5,000 円



5月から7月に入会する者

- (1) 正会員 5,000 円
- (2) 準会員1号 5,000 円
- (3) 準会員2号 2,500 円

準会員制度の発足後、対応すべき最初の内容になりました。当委員会では、今後も必要に応じて既存の規則等の改定や、新たな規則等の策定にしっかり対応していきたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

リバース型人工肩関節運用委員会報告

委員長 山門浩太郎

前回のニュースレターでお伝えしていた通り、RSA 実施医の資格に「肩周囲の骨・軟部腫瘍手術実施医基準」が実施医区分 C として新たに加わりました。資格要件として、日本整形外科学会認定骨・軟部腫瘍医であること、肩周囲の悪性骨・軟部腫瘍広範切除手術の術者としての経験 10 例が設定されています。肩関節学会員が実施医区分 C だけを取得して RSA をおこなうことはおそくないと思われませんが、腫瘍切除後に RSA の手術を依頼されるケースや手術への参加を求める機会も考えられます。実施区分 A (「腱板資格」と区分 B (「骨折資格」) での腫瘍切除について、ガイドラインではその可否を直接的には記載していませんが、ガイドライン作成時の腫瘍学会 (腫瘍外科医) サイドのスタンスとしては、あくまでも再建手段の一つとして、すなわちカスタムインプラントの代替手段としての RSA の使用を意図したものであり、RSA の使用を積極的に勧めるものではないことを理解したうえで慎重な対応が必須と考えます。治療の最終手段と位置付けられる RSA の使用において、適応の是非あるいは可否について判断に迷う症例は、事務局あてに症例のあらましと画像をお送りください。(PPT にて作成)

また、今回のガイドライン改訂において、特に三角筋機能不全について「三角筋の完全機能不全例にリバース型人工肩関節を適応する時は有茎もしくは遊離筋皮弁などの適切な処理を考慮する」あるいは「腫瘍自体の予後から勘案した適切な切除範囲により生じる三角筋機能不全は、それ自体ではリバース型人工肩関節の禁忌とならないが、リバース型人工肩関節使用の最大目的は術後の機能回復であることを念頭に置く」といった踏み込んだ記載が追加されています。RSA の予後は三角筋機能に深く依存するところであり、該当症例の治療を検討される際には改訂されたガイドラインをご参照いただくようお願いいたします。(2021 年 9 月 16 日一部改訂 リバース型人工肩関節全置換術適正使用基準：日本整形外科学会 会員専用ページに掲載)

日本肩の運動機能研究会運営委員会

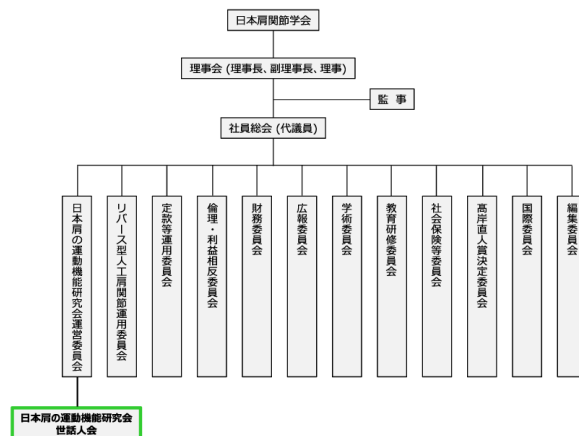
委員長 森原 徹

「肩の運動機能研究会」は、一般社団法人である日本肩関節学会 (以下、学会) に帰属する組織として「日本肩の運動機能研究会 (以下、研究会)」に名称を変更し、継続的組織となって 2 年となりました。2021 年 10 月に初代委員長である浜田純一郎先生が勇退され、わたくし森原 徹が後任として委員長となりました。今後ともよろしくお願いたします。

2021 年に開催された第 18 回日本肩の運動機能研究会では、当運営委員会と連携した世話人会が中心となって飯田博己会長と、座長選定 (座長リストの共有)、主題への演題募集の協力を行いました。研究会学術集会では会員、準会員 1 号・2 号の参加者によって、盛況の中無事終了いたしました。現在、準会員 1 号は 272 名、準会員 2 号は 330 名となっています。

今後、研究会の規則を作成し、学会の中での研究会の役割を明確にする予定です。規則については世話人会で起草し、当委員会で審議・承認した後、定款等運用委員会、理事会の審議・承認を受けたいと考えています。

研究会の「理論と実践に基づいて肩運動機能を解明し、肩関節傷害の病態・診断・治療・予防の進歩及び普及を図る」理念が遂行できることが肩関節学の発展に寄与すると考えています。会員の皆さまのご理解・ご協力を今後ともよろしくお願いいたします。



選挙管理委員会報告

前委員長 森原 徹

2021年度は代議員と会長選挙を行いました。

1. 代議員選挙

【選挙結果】

2021年10月施行のWeb代議員選挙の結果、下記の代議員を選任した。

(代議員選挙公示は、2020年度(2021年6月)の事業で公示済み)

●代議員選出規則第4条2推薦基準(1)～(3)該当者

(選任6名・五十音順)

大前博路、落合信靖、佐原 亘、八田卓久、廣瀬聡明、三宅智

総投票数65票、有効票65票

最高得票数は60票、最低当選得票数は34票であった。

*代議員立候補者15名に対し、1回目に信任投票を行い、議決権を持つ出席代議員65名から、10名が2/3以上の信任投票を獲得した。今回、公募数が6名のため、10名に対し選任投票を行った結果である。

2. 学術集会会長選挙

【選挙結果】

2021年10月施行の学術集会会長選挙の結果、下記のとおり決した。

(学術集会会長選挙公示は、2020年度(2021年6月)の事業で公示済み)

第51回日本肩関節学会学術集会会長 正会員 今井晋二

(総投票総数65票、有効投票数65票、信任63票)

3. 今年度の活動内容

1. 理事・代議員選挙公示(2022年6月公示、選挙は2022年10月(2022年度))
2. 第52回学術集会会長選挙(同上)を施行する予定である。



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

Newsletter

日本肩関節学会 委員会一覧

2022年1月11日現在

<常設委員会>

雑誌「肩関節」編集委員会

担当理事：今井晋二

委員長：佐野博高

副委員長：内山善康 鈴木一秀

委員：新井隆三 石垣範雄 石毛徳之 糸魚川善昭 梶田幸宏 北村歳男 木田圭重

黒川大介 後藤昌史 西須孝 酒井忠博 塩崎浩之 設楽仁 杉本勝正

田中誠人 谷口昇 夏恒治 二村昭元 八田卓久 三幡輝久 三好直樹

村成幸 山門浩太郎 山口浩 山崎哲也

アドバイザー：中川照彦 仲川喜之

国際委員会

担当理事：菅谷啓之

委員長：三幡輝久

委員：糸魚川善昭 乾浩明 瓜田淳 高橋憲正 谷口昇 二村昭元 松村昇

アドバイザー：井樋栄二

高岸直人賞決定委員会

担当理事：伊崎輝昌

委員長：船越忠直

委員：新井隆三 池上博泰（次期会長） 乾浩明 大泉尚美 岩堀裕介（前会長）

菊川憲志 北村歳男 後藤英之 後藤昌史 高瀬勝己（現会長） 高橋憲正

谷口昇 中川滋人 二村昭元 夏恒治 山本宣幸

アドバイザー：高岸憲二 玉井和哉

社会保険等委員会

担当理事：橋口宏

委員長：望月智之

委員：菊川憲志 黒川大介 杉本勝正 高橋憲正 田中誠人 名越充 廣瀬聰明

アドバイザー：中川照彦 高瀬勝己

教育研修委員会

担当理事：菊川和彦

委員長：後藤英之

委員：相澤利武 内山善康 大泉尚美 落合信靖 国分毅 小林尚史 小林勉

酒井忠博 末永直樹 船越忠直 山本宣幸 吉田雅人



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

Newsletter

学術委員会

担当理事：高瀬勝己

委員長：藤井康成

委員：乾 浩明 落合信靖 後藤昌史 塩崎浩之 田崎 篤 林田賢治 水野直子
三幡輝久 山門浩太郎 山本宣幸 横矢 晋

アドバイザー：浜田純一郎 森澤 豊

広報委員会

担当理事：田中 栄

委員長：北村歳男

委員：新井隆三 大前博路 梶山史郎 菊川憲志 国分毅 小林 勉 夏 恒治
西中直也 松浦恒明 美船 泰 三宅 智 村 成幸 望月 由

財務委員会

担当理事：岩堀裕介

委員長：中川滋人

委員：石毛徳之 国分毅 酒井忠博 佐原 亘 設楽 仁 村 成幸

外部アドバイザー：柄澤 徹

倫理・利益相反委員会

担当理事：橋口 宏

委員長：名越 充

委員：落合信靖 鈴木一秀 二村昭元 田中 稔 水野直子 三宅 智

外部アドバイザー：柄澤 徹

定款等運用委員会

担当理事：伊崎輝昌

委員長：西中直也

委員：糸魚川善昭 田崎 篤 橋本 卓 松村 昇

アドバイザー：柴田陽三 中川泰彰 森澤 豊

外部アドバイザー：柄澤 徹

リバーズ型人工肩関節運用委員会

担当理事：菅谷啓之

委員長：山門浩太郎

委員：落合信靖 木村明彦 小林尚史 松村 昇 水野直子 最上敦彦

アドバイザー：高岸憲二 中川泰彰

日本肩の運動機能研究会運営委員会

担当理事：岩堀裕介

委員長：森原 徹

委員：甲斐義浩 黒川大介 見目智紀 小林尚史 佐原 亘 高村隆 田中誠人 立花 孝
藤井康成 船越忠直 村木孝行 山口光國 山崎哲也

アドバイザー：中川照彦 浜田純一郎

<特別委員会>

選挙管理委員会

委員長：田崎 篤

委員：新井隆三 大泉尚美 橋本 卓 松浦恒明 山口 浩

50周年記念編纂委員会 (仮称)

担当理事：菊川和彦

委員長：国分 毅

委員：大泉尚美 大前博路 菊川憲志 黒川大介 佐原 亘 酒井忠博 設楽 仁 西中直也 松村 昇

アドバイザー：柴田陽三

<ワーキンググループ>

学術集会検討 WG

担当理事：高瀬勝己 (現会長)

委員長：池上博泰 (次期会長) 岩堀裕介 (前会長) 今井晋二 (次々期会長) 末永直樹 (前々会長)

アドバイザー：中川照彦

▶ 特別なお知らせ

今回号から3つの新企画を設けました。

1. 最新の学術論文紹介

① 高岸直人賞受賞紹介

肩関節学会が毎年選出する高岸直人賞論文(基礎編 臨床編)を紹介いたします。

英文論文として採用されている内容を、筆者ご自身に、読みやすい字数にまとめていただき、その要旨として紹介しています。

② 推薦学術論文紹介

推薦論文として肩関節分野の興味深い論文を紹介します。

2. 海外留学記

海外に目を向け、留学中や海外で活躍する肩関節学会会員を紹介する企画です。

様々な地域での留学中の異文化での生活の大変さや喜び、研究環境を報告していただきます。留学を志す先生必見のコーナーです。

3. 肩関節外科医を志す人たちへ - 肩の魅力を語る -

これまで肩関節学会を牽引されてきた先生方から、肩の魅力を語っていただくコーナーです。

これらはいずれも今後継続していく予定の企画ですので、毎回楽しんでお読みいただくことを願っています。

▶ 学術論文紹介

第34回（第47回日本肩関節学会）高岸直人賞受賞 基礎論文

稲城市立病院 整形外科 高田裕平

Aging Aggravates the Progression of Muscle Degeneration After Rotator Cuff Tears in Mice
 Takada Y et al.

Arthroscopy. 2021 Sep 24; S0749-8063(21)00846-X.

腱板断裂後の筋変性（脂肪浸潤・線維化）は腱板修復不能因子および術後成績不良因子として知られている。動物モデルで筋変性を再現することは未だ困難であり、その病態は明らかではない。腱板断裂が高齢者に好発することから、我々は筋変性には組織の加齢性変化が必要であると仮定した。本研究の目的はマウス腱板断裂モデルを用いて、棘上筋の筋変性に加齢と時間経過が及ぼす影響を検討することである。

C57BL/6 メスマウス、若齢マウス（12週齢）と加齢マウス（50～60週齢）をそれぞれ29匹ずつ用い、コントロール群では皮膚切開のみの偽処置を、腱板断裂群では神経切離を行わずに腱板切離を行った。処置後4週および12週で棘上筋を採取し、脂肪・線維面積の測定、脂肪分化・線維化関連遺伝子・タンパク質発現の評価を行い、加齢及び腱板断裂後の時間経過が筋変性に及ぼす変化を統計学的に評価した。

若齢マウスでは腱板断裂に伴う筋内脂肪面積の変化を認めなかったが、加齢マウスではコントロール群と腱板断裂後4週群、腱板断裂後4週群と腱板断裂後12週群の間においてそれぞれ筋内脂肪面積の有意な増加を認めた。若齢マウスと加齢マウスの比較では、コントロール群においては有意差を認めなかったが、腱板断裂群では加齢マウスで筋内脂肪浸潤が腱板断裂後4週群、腱板断裂後12週群ともに若齢マウスと比較して有意に増加していた（Figure1）。筋内線維面積に関しては加齢マウスにおいて腱板断裂後12週群がコントロール群に比べ有意に増加しており、若齢マウスの腱板断裂後12週群と比べても有意に増加していた（Figure2）。また、脂肪分化・線維化関連遺伝子、脂肪マーカであるペリリピンタンパク質の発現が若齢マウスに比べ加齢マウスで増強していた。

本研究結果から、腱板断裂後の筋変性には加齢が必要であり時間経過とともに増悪することが明らかとなった。加齢マウスを用いた神経切離を伴わない本モデルはより生理的な腱板断裂後の筋変性を再現しており、筋変性の病態の解明に有用であると考えられた。

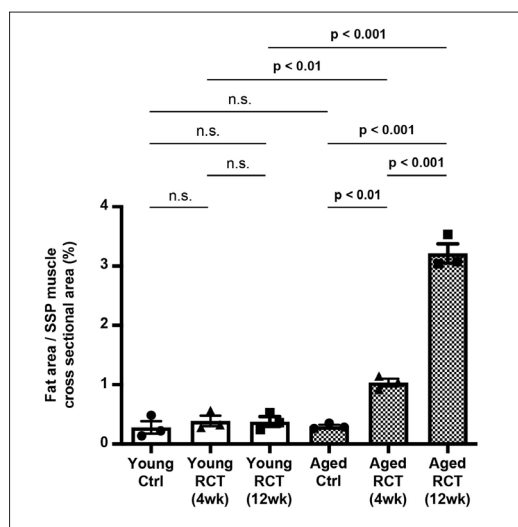


Figure1

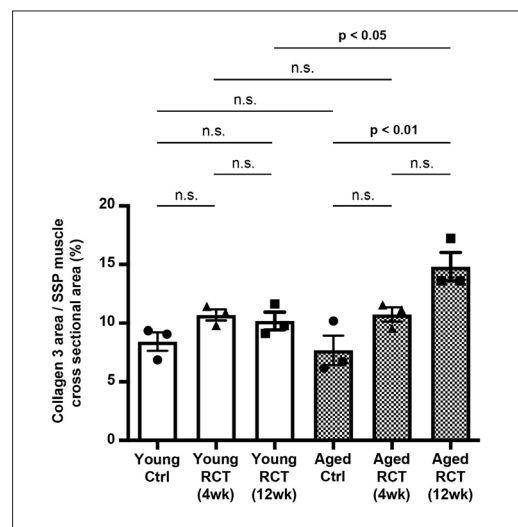


Figure2

第34回（第47回日本肩関節学会）高岸直人賞受賞 臨床論文

大阪大学大学院医学系研究科 整形外科 廣瀬毅人

On-the-Edge Anchor Placement May Be Protective Against Glenoid Rim Erosion After Arthroscopic Bankart Repair Compared to on-the-Face Anchor Placement

Hirose T et al.

Arthroscopy. 2021 Oct 29; S0749-8063(21)00922-1.

肩関節前方不安定症に対する鏡視下 Bankart 修復術 (ABR) 後に肩甲骨関節窩前縁で骨吸収が起こり得ることがわかってきており、我々はその頻度や程度、経時的变化を術前骨形態別に調査し報告してきた。¹種々の要因がこの危険因子と推察される中で、アンカー挿入位置の違いが同部位への応力の差を生み、骨吸収につながるという報告もある。²本研究ではこれを受け、ABR 施行の際のアンカー位置を On-the-face から On-the-edge へと変更し、関節窩骨吸収変化に与える影響を検討した。肩前方不安定症に対し、ABR を施行した全 225 肩を対象とした。2018 年 3 月までの 151 肩は On-the-face anchoring (F 群) で、2018 年 4 月以降の 74 肩は On-the-edge anchoring (E 群) に変更して手術した。術前後の 3DCT より関節窩横径の変化を求めた。すると、術後初回 CT (6 か月以内) において関節窩横径の変化率は F 群: $-7.6 \pm 7.9\%$ 、E 群: $-0.1 \pm 9.7\%$ であり、edge anchoring で関節窩横径の減少が有意に抑制されていることが判明した ($p < .0001$)。また、この傾向は異なる術前骨形態に共通のものであり、特に術前に関節窩骨欠損を伴う erosion 型と骨性 Bankart 型で有意であった。さらに、術前骨性 Bankart 型の症例では、F 群における骨片癒合率が 39.7%であった一方、E 群では 71.8%と骨片癒合率は E 群で有意に高かった ($p = .001$)。そして重要なことに、両群とも関節窩横径の減少は骨片が癒合しなかった症例に多く、横径減少を示す症例の割合は F 群で高く E 群で低かった。本シリーズのうち、術後 CT を 2 回撮影していた 112 肩 (F 群: 64 肩、E 群: 48 肩) を抽出すると、術後初回 CT での関節窩横径減少率はやはり E 群で抑制されていたが、関節窩横径の経時变化を確認すると、両群とも術後 2 回目 CT (1 年以内) では術前骨形態にかかわらず有意な横径の回復を示した。最後に、アンカー挿入位置の違いによる再発率の差は認めなかった (F 群: 14.7%、E 群: 14.6%)。結論として、ABR 後早期の関節窩前縁骨吸収に対し、On-the-edge anchoring は On-the-face anchoring と比較して予防的である可能性が示唆された。

(参考文献)

- 1.Hirose T, Nakagawa S, Iuchi R, Mae T, Hayashida K. Progression of erosive changes of glenoid rim after arthroscopic Bankart repair. Arthroscopy 2020; 36: 44-53.
- 2.Inoue K, Suenaga N, Oizumi N, et al. Glenoid bone resorption after Bankart repair: Finite element analysis of postoperative stress distribution of the glenoid. J Shoulder Elbow Surg 2021; 30: 188-193.

推薦学術論文

推薦者 日本肩関節学会広報委員担当理事 東京大学 整形外科 田中栄

Non-surgical and surgical treatments for rotator cuff disease: a pragmatic randomised clinical trial with 2-year follow-up after initial rehabilitation.

Cederqvist S et al.

Ann Rheum Dis. 2020; 80: 796-802.

(背景) 腱板損傷 (rotator cuff disease, RCD) 患者において、保存療法が奏功しない場合には外科的治療が行われる。この論文では実臨床に即した方法で保存療法と外科療法を比較する randomised controlled trial (RCT) を行った。

(方法) 3 カ月以上の保存療法に抵抗性であった RCD 患者に対して腱板の損傷程度を明らかにするために造影 MRI を撮像した後、保存療法群と外科療法群にランダムに振り分けて治療による差を検討した。Primary outcome はランダム化 2 年後の VAS score で調べた疼痛の変化、Constant score (CS) で調べた肩関節機能の変化であり、Secondary outcome としては RAND 36-Item Health Survey で測定した健康関連 QOL である。ランダム化されたのは 187 人 190 肩で、95 肩が手術群 (全層 RCD50 肩、うち 44 肩は棘上筋腱単独損傷)、95 群が非手術群 (全層 RCD48 肩、うち 44 肩は棘上筋腱単独損傷) に振り分けられた。保存療法が失敗した (強い痛み、機能不全あり) 患者に対しては手術療法が勧められ、12 肩 (13%) で手術が行われた。また手術群のうち 36 肩 (38%) は手術前に疼痛が改善したため手術を受けなかった。結果として 75% がプロトコール通りの治療を受けた。

(結果) 2 年後の VAS score は非手術群で 31 (95% CI 26 to 35)、手術群で 34 (95% CI 30 to 39) 減少し、両群に差はなかった。CS は非手術群で 17.0、手術群で 20.4 改善し、これも有意差は見られなかった。部分 RCD の subgroup で検討した場合も疼痛、CS の改善に有意差はなかったが、全層 RCD 患者では VAS score 改善が非手術群 24、手術群 37 と手術群における改善が有意に良好であった (mean difference: 13, 95% CI 5 to 22; $p=0.002$)。CS の改善も 13.0 vs 20.0 と手術群が良好だった (mean difference: 7.0, 95% CI 1.8 to 12.2; $p=0.008$)。全層 RCD の subgroup において、RAND-36 で調べた QOL score は非手術群、手術群で有意差はなかったが、疼痛スコアは手術群で有意に良好であった。

(感想) 全層 RCD に対する保存療法、外科療法を比較した過去の RCT の結果は必ずしも一定しておらず、両治療法に差がないとするものも少なくない。本研究とそれらとの違いとして、外傷性の損傷を 17% 含んでいること、十分な保存療法後に部分損傷、全層損傷両者を対象にしてランダム化したことなどが挙げられているが、このような点にも手術を対象にした RCT の難しさがあるように思われる。

外科療法の有効性を検証した RCT において、しばしば手術が無効であるという結果が報告されている。おそらくこのようなケースの多くは、手術が無駄という訳ではなく、「手術が有効な subgroup を同定できていない」ことが原因ではないかと思われる。今回の研究では部分損傷か、全層損傷かという比較的わかりやすいところで差が出たが、例えば腱板損傷の部位や関節拘縮の程度などによっても差がある可能性がある。将来的に外科療法が生き残るためには、手術が有効な subgroup をしっかりと同定すること、すなわち適応となる症例の選別をしっかり行うことが重要であろう。

▶ 海外留学記：アメリカユタ大学整形外科

理学療法士 石川博明

東北大学大学院医学系研究科肢体不自由学

現在、東北大学からユタ大学に留学中の石川博明先生に広報委員会から留学記を依頼させていただきご寄稿いただきました。

今現在留学を考えておられる先生も多いと思いますが、現在このコロナ禍で実際に留学された先生のご意見は非常に参考になると思います。

1. 自己紹介

私、東北大学大学院の石川博明と申します。職種は理学療法士であり、日本では大学院で非常勤講師をしております。前職では、東北大学病院リハビリテーション部に所属し、2008年から2020年までの約12年間、臨床業務に携わっておりました。また、2015年に東北大学で博士号(障害科学)を取得し、肩関節バイオメカニクス、リハビリテーションに関する基礎・臨床研究を行っております。

2020年12月よりアメリカのユタ州(ソルトレイクシティ)にあるユタ大学整形外科に留学し、現在も研究を続けております。私の知る限り、理学療法士の研究留学は稀であり、コメディカルの立場からの留学記は非常に少ないのではないかと思います。長引くコロナ禍で気持ちが内向きになりやすい時期ではありますが、この留学記が留学を志す医師・コメディカルの背中を押す一助となれば幸いです。

2. 海外留学を決めたきっかけ、留学先を決めたきっかけは何ですか。

2010年(社会人3年目)に大学院に進学してから、留学に対して漠然とした思いがありました。この思いが決定的になったきっかけは、2012年にサンフランシスコで開催されたAAOSに参加したことです。大学院の指導教員であった村木孝行先生(東北大学病院リハビリテーション部・技師長)の演題が採択され、その共同演者である私の学会参加費が無料であったことから、軽い気持ちで参加しました。ところが、会場を目の当たりにすると、私の軽い気持ちは一変しました。国内の学会とは比べられない程の規模、参加者の多さに圧倒され、見るものすべてが華やか、新鮮でありました。一緒に同行させて頂いた東北大学整形外科の先生は華麗に質疑応答し、フロアでは各国の知り合いと談笑するなど、20代の若者にとっては衝撃的な経験となりました。この学会をきっかけに、私も国際学会で発表し、必ず海外に留学すると決意しました。

しかし、ここから数年、私にとって不毛の時期が続きます。2015年に学位を取得し、研究費の獲得や国際学会で発表するなど、それなりに頑張ってきました。私生活では結婚し、子供が誕生するなど充実してはおりましたが、留学への思いが徐々に薄れていくのも感じていました。マンネリ化が続き、留学行く行く詐欺になりかけていた頃、2018年の東北大学肩グループの忘年会で川上純先生(東北大学整形外科)がユタ大学に留学するという話を聞きました。その日の帰宅後、若干酩酊状態で留学先を調べてみると、私の研究テーマである腱板断裂、投球障害肩・肘に関して著名であるDr. Tashjian、Dr. Chalmersの研究室であることが分かり、留学するならこしかならないと思立ちました。

3. 海外での留学や生活について不安だったことがありますか。そしてその不安について今現在はどう感じておられますか。

留学に対して淡い希望を抱いていたものの、実際に生活できるのだろうかと不安な思いはありました。私は、会社勤めの父と専業主婦の母のもとで育ち、小さい頃は海外どころか国内でも飛行機に乗ったことがなく、海外とは無縁の純ジャパニーズでありました。そのため、異国の地で生活することのイメージが湧かず、未知への不安を抱えていました。さらに、新型コロナウイルスの影響によりビザの取得ができなくなり、2020年4月に留学する予定が延期となってしまいました。3月の時点で既に病院を退職し、マンションも退去する予定であったため、4月からは妻の実家に居候することになりました。その間は、無職で失業保険を貰いながら生活しておりましたが、仕事も失い、いつ留学できるかわからない中、非常にストレスな日々を送っておりました。

その後、9月頃からアメリカ大使館のビザ発給業務が再開し、ユタ大学も再度受け入れてくれることが決まりました。ユタ大学では約4ヶ月間、川上先生と一緒にすることができ、研究や生活の準備を手伝っていただくなど、非常に心強い存在でありました。コロナ禍の留学で紆余曲折ありましたが、実際に留学できたことで不安はすべて解消し、今となってはよい思い出です。

4. 海外留学について最初にご家族に話された際の反応はいかがでしたか。どのように説得されましたか。そして今現在のご家族の反応はいかがですか。

妻には結婚する前から留学への思いをなんとなくは伝えていました。しかし、一向に留学しない私を見て、留学を諦めたかと思っていたようです。前述の忘年会で留学を決意し、即座にユタ大学へ留学したい旨を井樋栄二先生（東北労災病院）、山本宣幸先生（東北大学整形外科）に伝えました。その結果、その年のAAOS（ラスベガス）でDr. Chalmersと会食する予定があるので、直接会って留学許可を貰う流れとなりました。ここまでの段取りを組んだ後、初めて妻に話しました。今振り返ると、破天荒な行動をしたと反省していますが、あの時は考えるより先に行動して外堀を埋めるしかないと思っていました。妻は勿論びっくりし、半ば呆れたような反応だったと思います。後日談として、当初は単身で行ってもらうと考えていたようです。妻は東北大学病院で看護師をしており、幸いなことに所属する感染症科には留学経験者が沢山おりました。私の説得というよりかは、感染症科の先生の強い勧めで家族帯同が決まったのではないかと思います。

現在は、当初の不安もなくなり、毎日充実した日々を過ごしております。長男（8歳）はElementary、長女（5歳）はKindergartenに通っており、現地の友達もできて楽しく過ごしています。ユタ大学の他の研究室には、同世代の子供を持つ日本人家族がおり、妻の安心材料の一つでもあります。

5. これから海外留学を考えておられる方にアドバイスをお願いします。

ネットインフラの整備により、海外の情報に気軽にアクセスすることができ、オンラインでの会議も可能な時代になりました。便利になった今、莫大なお金を使って留学することに対して、疑問を持たれる方もいるかもしれません。しかし、海外の方と直接会い、直接目にした経験はオンラインとは比べものにならないほど貴重なものでした。また、家族のいらっしゃる方は、ぜひ家族帯同をおすすめします。病院勤務時代と比べて家族との会話が格段に増え、父親の存在意義を確認できます。また、子供達は現地校で質の高い英語教育を受けることができ、驚くほど語学力が向上します。それだけでも、今回の留学に数百万円を費やした価値があると思っています。

現地にいる肌感として、アメリカは通常の生活に戻っており、安心して研究、生活できると思います。特に、コロナ禍で留学希望者が減少しているので、留学助成金を獲得しやすい今がチャンスでもあります。私のようなごく一般的な日本人が留学できておりますので、コロナ禍でも躊躇せずに挑戦していただければと思います。この場を借りて留学の機会を与えて頂いた井樋先生、山本先生、数多くの東北大学関係者、家族に感謝を申し上げます。

6. 研究室・ユタ州紹介

最後に、私の勤務しているユタ大学 Orthopaedic Center とユタ州および周辺の魅力を紹介したいと思います。

ユタ大学では大学病院の他に整形外科専門のクリニック（4階建て）があり、外来から手術、リハビリテーション、研究までをすべて同一施設内で行うことができます。研究室は1階にあり、Instronや三次元動作解析装置、ロボットシミュレーターなどが備わっており、様々なバイオメカニクス研究を行うことができます。私は、主にCadaverを用いた基礎研究を行い、関節唇や筋などの軟部組織が肩関節安定性に与える影響を調べ、リハビリテーションへの応用を目指しています。

ユタ州はアメリカ西部の高山地帯に位置します。州都はソルトレイクシティであり、2002年に冬季オリンピックが開催されたように、ウインタースポーツが盛んな地域です。ユタ州やその周辺には数多くの国立公園があり、休暇のたびに国立公園巡りをしています。また、スポーツはアメリカンフットボールやバスケットボールが盛んであり、特に本場のNBAを観戦した際には家族全員が大興奮しました。さらに、近隣のロサンゼルス・アナハイムまで足を運べば、大谷選手の試合を観戦することができ、私のような野球好きの方にはたまらない場所ではないかと思います。



A. Orthopaedic Centerの外観
B. 研究室
C. 実験風景



【アメリカの国立公園】
A. グランドキャニオン（アリゾナ州）
B. アーチーズ（ユタ州）
C. イエローストーン（ワイオミング州）
D. ブライスキャニオン（ユタ州）



A. NBA（ユタ・ジャズ）
B. MLB（ロサンゼルス・エンゼルス）

石川博明先生の熱い想いと海外留学の魅力が伝わってくる留学記をいただきました。改めて留学したいと感じた読者も多かったのではないかと思います。

石川博明先生ありがとうございました。

担当：日本肩関節学会 広報委員会 夏恒治（広島市民病院）

▶ 海外だより～ Letters from Overseas Colleagues ～

長谷川典子

(ラッフルズ・ジャパニーズクリニック：シンガポール)

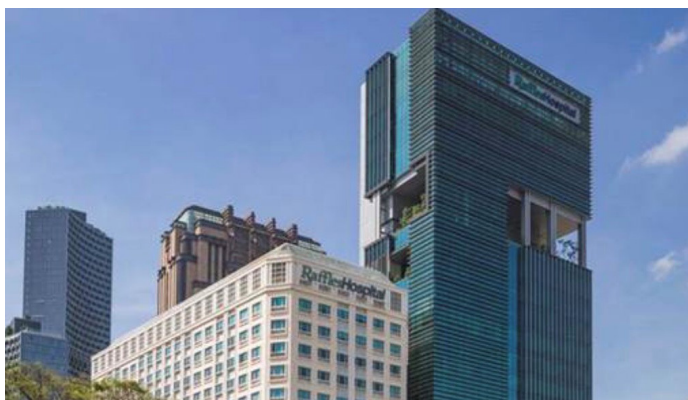
海外で勤務されている学会員がおられるという噂を耳にし、これは是非お話を伺いたいということで広報委員会からシンガポールのラッフルズ・ジャパニーズクリニックにご勤務の長谷川典子先生にアポイントメントを取らせていただき、日本と違った現地の特徴やご苦労などご寄稿を依頼させていただきました。

皆様、はじめまして。

シンガポールのラッフルズ・ジャパニーズクリニックで整形外科外来を担当しております、長谷川典子と申します。

日本肩関節学会には、2019年に済生会新潟病院副院長・整形外科部長である塩崎浩之先生に推薦して頂き、さらにご縁ありこの原稿を執筆させて頂くこととなりました。私のような者が寄稿するには余りに恐縮ですが、この原稿でシンガポールの医療事情を少しでも皆様にお伝え出来たら嬉しいです。

私は元々は救急医学を専門とし、救命センターやその関連病院の整形外科で働いておりましたが、家族の都合でシンガポールに移住し、現在の職場には2010年より勤務しております。当院について簡単に紹介させて頂きますと、2003年に邦人向けクリニックとして設立された医療機関であり、日本人医師12名・歯科医師4名・日本人看護師・看護助手・歯科助手、事務員が常駐しております。患者さんの大多数は駐在員とその家族、語学留学生や（コロナ禍でほとんど見かけなくなりましたが）旅行者です。



ラッフルズホスピタル

ところで、シンガポールと日本との間には二国間協定があり、当地では日本人医師30名に限り、日本の医師免許で日本人患者への外来診療を許可されております。歯科医師は15名に限り同様に許可されています。（同様に、日本でもシンガポール人医師2名に限り、シンガポール人を診療可能らしいのですが、詳細は不明です。）当院はラッフルズホスピタルという入院設備も持つ病院の中にあり、シンガポール人専門医と連携を取りながら日本人患者の診療を進めております。

ところで、シンガポールと日本との間には二国間協定があり、当地では日本人医師30名に限り、日本の医師免許で日本人患者への外来診療を許可されております。歯科医師は15名に限り同様に許可されています。（同様に、日本でもシンガポール人医師2名に限り、シンガポール人を診療可能らしいのですが、詳細は不明です。）当院はラッフルズホスピタルという入院設備も持つ病院の中にあり、シンガポール人専門医と連携を取りながら日本人患者の診療を進めております。

・・・と、ここまででは非常に魅力的に聞こえる二国間協定ですが、実は外科系医師にとっては大きなデメリットがあります。手術に関しては、日本人患者の手術であっても一般的には執刀は出来ず、見学のみしか許可されていないことです。ただ、臨床留学をされている先生と同様の書類上の手続きを取ることで、日本人患者の手術に限り助手になることは可能です。実は私もその手続きを取り助手は許可されていますが、実際のところは専門医と働く時間帯が合わないことが多く、日々の外来診療と重なってしまい手術の見学すら難しい状況なのが残念なところです。

しかしながら、医療文化や言語の問題からご不安になられている患者さんも多いため、手術には入れないまでも可能な限り患者さんの気持ちに寄り添った医療を心がけるようにし、依頼に応じて術後回診をしています。入院中の主治医はシンガポール人医師ですので、お話をしたり通訳をしたりといったことに限定はされますが、海外での入院中の不安を少しでも解消するお手伝いをしています。

また、前述のようにシンガポールの日本人社会は駐在員とその子供が多いため、人口構成が日本とは異なり、結果として日常的に診る疾患の構成も異なってくることは興味深いことと言えます。人口ピラミッドで現代の日本が「つば型」だとすると、シンガポールの日本人社会は「ひょうたん型」になると思います。(2019年の統計上、シンガポールの全人口569万人に対し日本人は約3万7千人なので、全体からすると小さな小さなグラフではありますが。)70歳以上の方が受診されることはほぼなく、骨粗鬆症、脊椎圧迫骨折、大腿骨頸部骨折などの症例はまず見かけません。

そのかわり当地では、上腕骨内側・外側上顆炎、バネ指、肩のインピンジメント、足関節捻挫や腰痛などは多く見かけます。テニス・ゴルフなどのスポーツの機会が多く発症してしまうのかもしれませんが。日本人が住むコンドミニアムの多くにはプールやテニスコート、ジムが併設されていますし、コロナ禍でなければゴルフ場も国内に限らずマレーシアやインドネシアにも足を伸ばせますし、スポーツに関連する疾患は日本より多い印象です。

また、足底腱膜炎の発症率も日本より高いと思います。こちらでは家の床は石で出来ており硬く、しかも年中暑いのでスリッパも履かず裸足でペタペタ歩いている方が多く、外出時もサンダル履きが多いことも負荷をかけているのかもしれません。

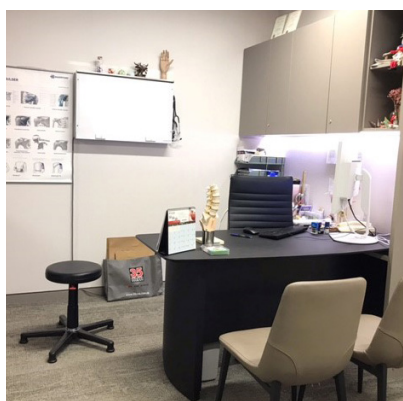
他には、日本には生息していない細菌による感染症を診る機会があったり、前腕の浮腫を主訴に来られた患者さんの診断に苦慮していたところ筋生検で寄生虫が検出されたり、といった珍しい症例に遭遇することは、現地ならではのようです。前者は特に知識がないだけに、ラボから連絡があっても最初は「?」「なぜわざわざ電話してきた?」と不思議に思っていて、その後調べて「がーん!」となり(苦笑)治療法を当地の専門医に相談しました。(ちなみに、類鼻疽菌という再発や重症化率の高い病原体で、東京都感染症情報センターによると日本国内で感染した事例は皆無ということです。)後者の前腕浮腫の患者さんも私には診断が付きませんでした。紹介先の整形外科専門医は筋生検に至るまでの決断が早く、もしかすると当地ならではの経験則なのかもしれません。

このように外来での診療において苦慮することも多いですが、シンガポール人専門医たちに相談できることは有難いことと感じています。こちらに来て間もないころは彼らとどう接して良いか分からず心細かったのですが、私が恐縮しながら日本人医師であることを自己紹介すると、当地の専門医 Dr. Bernard Lin は、「日本から来たんだ?僕は数年前に東北大学の井樋栄二先生のところでフェローさせてもらっていたよ。どうぞよろしく。」といきなりフレンドリーになり(笑)私は驚き、井樋先生の世界的知名度に大変助けられました。

また、保険についてのことも、当地の日系医療を語る上では外せません。多くの患者さんは日本の海外旅行保険に加入しておられ、その多くは「受傷日もしくは初診日から180日」を同一疾患での保険の満了日としています。ですので、診察の際はなるべく患者さんが自費負担とならないように、満了日を見据えながら早期に治療を進めることが必要で、これも日本にいたときとは異なる治療上の戦略だと思います。限られた期間の中で出来るだけのパフォーマンスを上げられるよう、常に180日を意識しながら治療をしています。時には、診察室で患者さんと一緒に日数計算のウェブサイトで計算して、満了日がいつなのか確認することさえあります。保険の適応外となった場合の医療



処置室



診察室



内視鏡室

費とくに手術代は高く、専門医の Specialist Fee によっても異なりますが、例えば腱板断裂の手術で 200 万円くらいでしょうか。

外国ですので医療システムの違いなどからストレスを感じることもありますが、コロナ前は患者さんが国内だけではなくインドネシアや、近接するマレーシアの州から国境を越えてやって来てくださることもあり、そんな時はやはりこの仕事に就かせてもらえて良かったと感じます。健康診断やセカンドオピニオンなどの方もいらっしゃいますが、異国の地で医療システムの違いやコミュニケーションのギャップから不安になって来院される方も少なくないです。そんな中で、当地の医療スタイルに協調しながら、出来る限り日本の良質の医療サービスを提供することが、当地で働くにあたって大事なスキルの 1 つと常々身を引き締めています。

・・・と、思いつくままに書き連ねてみましたが、いかがでしたでしょうか。普段の診療は日本の外来とそう変わらないことをやっているつもりでいましたが、こう見返してみると日本と違うことも結構あるものだという事に、書いている本人もあらためて気づかされました。今回このような企画をご提案下さった熊本整形外科病院の北村歳男先生、広島市民病院の夏恒治先生、どうもありがとうございました。

日本とは違った環境、医療システム、保険制度、そして日本ではなかなか経験することがない疾患などでも興味深いお話を伺えました。日本という枠にとらわれず海外に飛び出すことに魅力を感じた読者も多かったのではないかと思います。

長谷川典子先生、ありがとうございました。

担当：日本肩関節学会 広報委員会 夏恒治 (広島市民病院)

▶ 「肩関節外科医を志す人たちへ」 - 肩の魅力語る -

邯鄲の夢

名誉会員 信原克哉 (信原病院・バイオメカニクス研究所 病院長)

唐の玄宗の開元年間、西暦 750 年頃に唐の沈既斉が書いた小説「枕中記」の中に、「邯鄲の夢、黄粱一炊の夢」というのがある。筋書きはこうである。

○西暦 750 年といえば、日本では聖武天皇が東大寺の大仏を建立した頃である。中国ではすでにこのような人生を論じる小説が書かれていた。

趙の邯鄲(河北省、旧都)の旅舎で休んでいた道士呂翁に、みすばらしい身なりをした魯生という青年が話かけてきた。きけば官吏登用試験に失敗して、科挙のためあくせくと働かねばならぬとのこと。彼はしきりに自分の身の不平をかこった。

○科挙：唐の時代、中国で行われていた官吏登用試験のこと。秀才、進士、明経などの階級に分けられ、経典や詩文などを試験していた。難解でみんな人生のエネルギーをすり減らしていたと云われている。日本の大学入試制度とそっくりである。

やがて眠くなった彼は呂翁から陶枕を借りて寝たところ、枕にある両端の孔が次第に大きくなってきた。入ってみると、そこに大きな邸宅があった。その家で魯生は気に居られ名家清河崔氏の娘を娶り、進士の試験にも合格して願望

の官吏にまで登りつめた。そこで思いがけず当地の長官にまで出世、さらに外敵を討つなどの勲功をたて、栄進して地位も爵位も上がり、この世の春を謳歌していた。

○陶枕:陶器製の枕のこと。形は長方形、高枕形、モザイク形など様々あるが、両端に穴があり、そこに香料やアルコール綿を詰めて香りや冷感を愉しむものが多い。我家には昔から転がっており、私自身も毎晩愛用している。

しかし、栄光は長く続かず、時の宰相にねたまれて左遷されてしまうのである。その後三年以上経ち、何とか名誉を回復しやと戸部和書にまで召され、再び宰相にまで登りつめ十年間、善政を敷き民衆から誉れの名を高くしたが、近隣の將軍らと謀叛を企てたとの讒言に会い、再び冤罪に苦しめられたのである。將軍たちは死刑となり、魯生は宦官によって救われ死罪は免れたものの、不幸にも病を得て失意のうちに果ててゆくのである。

※

※

※

目覚めて欠伸すると、魯生はもとの邯鄲の旅舎に居る。そばに道士呂翁が座っている。枕許の黄粱はまだ煮えていないほどの短い間の出来事であった。人生はみんなそんなもの、すべて夢であるという故事である。

この話を読んで私は医局に入った当時のことを思いだした。無給医局員という肩書を頂いて毎日、阪神電車で揺られて大学病院に通っていた頃の自分である。夢があり希望にみちていた頃の自分である。事故があり電車が30分ほど遅れたので、息せき切って診察室に到着すると、先輩の一人から“何時と思っとるんや”との叱責を受けた。“今ですか、9時30分です”と答えたが、腹の虫は収まらなかった。電車の遅延は阪神電気鉄道のせいで自分に非はない、また私は無給なので遅延に対して法的責任はない、年が数年しか違わないチンピラが先輩面して血統正しい自分に怒るとは何事か、喧嘩になれば当然俺が勝つ、様々な思いがあって私はすぐに自宅に戻った。後日聴かされた話だが、その先輩は上から散々油を搾られたそうである。

※

※

※

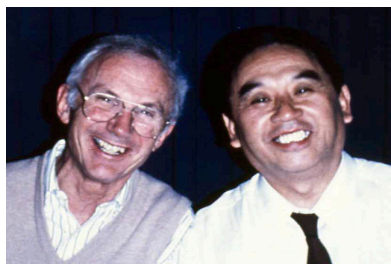
あれからはや半世紀以上が経つ。医局での修行と快樂、滞米中の辛酸と希望、学会での悦びと反省、野に伏してからの苦勞と栄光、肩関節疾患に祟られながら、現在まだ生きている。若者にはただ、人生すべて夢である、自尊自重であれと願いたい。



若き日の姿

国際肩肘学会（シドニー）の晩餐会での演奏、
Mr. Gramme Bell and Worldwide Jazz Band と

Snyder 夫妻と



Prof. Hans K. Uthhoff（オタワ大学教授）先生と



Prof. Neer（コロンビア大学）先生と私の家族



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

Newsletter

▶ 事務局からのお知らせ

2022年になってから早くも1ヶ月が経ってしまいました。

一時期はコロナ感染も落ち着き、勤務体制もコロナ前に戻るかと思いきや、またオミクロン感染者が急激に増え、またもや出社と在宅勤務の双方での業務が続くようです。在宅勤務でも支障がない社員は一定数いるようなので、もしかしたら将来的にもこのまま出社と在宅を Mix した勤務体制というのが、弊社や世の中では今後、主流になるのかしらと思ったりもしています。事務局を担当している私個人は、断然出社派なのですが・・・

引き続き、電話応対などでご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、ご容赦いただけましたら幸いです。

今回は、広報委員会の新しい企画で、海外留学、海外で勤務をされている先生方からの寄稿、論文紹介など今までとは少し異なる内容のニュースレターとなりました。

先生方の中で「このような内容の記事が読みたいな」などのご意見がありましたら、是非事務局までご連絡いただければ幸いです。

編集

広報委員会

後記

新井隆三

あけましておめでとうございます、という正月気分もそこそこに、巷ではオミクロン旋風が吹き荒れています。例年よりもずっと寒くて太平洋側でも雪が積もり、はるか南太平洋では前代未聞の海底火山噴火、息つく暇もなく西日本でまたも大きな地震がおき、隣国から飛んでくるミサイルにさえ危機感が鈍くなっている、そして当たり前のようにあったポテトさえ品切れ状態・・・。

世界の終末観さえ漂ってくる今日この頃ですが、日本肩関節学会も厳しい環境の中でいろいろな改革を講じています。本ニュースレターも新企画を打ち出し、より知的好奇心をそそる読み物としてステップアップしていこうとするところです。ご寄稿くださった先生方、原稿をまとめてくださる広報委員の先生方、山積した細かい修正点にもめげずに対応して下さる事務局員さんのおかげで、ようやく発刊にこぎつけられました。

まだまだ不透明な世の中ですが、できることをがんばって飛躍につなげていくしかないじゃない、と改めて思った次第です。今後ともどうぞよろしく願い申し上げます。



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

編集：一般社団法人日本肩関節学会広報委員会

田中栄（担当理事）、北村歳男（委員長）、新井隆三、大前博路、梶山史郎、菊川憲志、国分毅、小林勉、夏恒治、西中直也、松浦恒明、美船泰、三宅智、村成幸、望月由

発行：一般社団法人日本肩関節学会

〒108-0073 東京都港区三田 3-13-12 三田 MT ビル 8 階株式会社アイ・エス・エス内

TEL03-6369-9981/FAX03-6369-9982

E-mail office@shoulder-s.jp URL :https://www.j-shoulder-s.jp/